

29G-pm16

フルオレセインを用いた抗がん剤調製指導の有用性 — 長期実務実習生を対象として —

○深山 靖夫¹, 森 達也¹, 岩橋 香奈¹, 齊藤 真一郎¹, 鈴木 義彦¹ (¹東京医療センター薬)

【目的】実習生に抗がん剤調製を指導するにあたり、操作の問題点を実習生が自覚し、問題の原因・対策をたてて解決する問題解決型の実習の有効性を検討した。

【方法】当薬剤科で長期実務実習を履修した実習生 11 名、他施設で履修した実習生 27 名、計 38 名を対象とした。薬液飛散を可視化するため 0.05%フルオレセイン液を用いて操作を行い、飛散の原因についてディスカッションし対策を検討した。実習後、実習生を対象に実習方法に関するアンケートを行った。

【結果・考察】実習生 38 名中、30 名から飛散が確認された。飛散の種類はスピル、スプラッシュ、針をむき出しにしたままエア抜きを行うことで生じる飛散の 3 種類であり、種類の違いは可視化により認識することができた。再度操作を行った結果、ほとんどの実習生は飛散をさせなかった。アンケート回答者は 38 名中 37 名であり、飛散が確認できた全実習生が問題点の把握・理解がしやすかったと回答した。飛散のない実習生においても本実習を通じて理解が深まり満足したと回答した。ほぼ全員が薬液飛散状況を確認できたことで抗がん剤調製に自信がついたと回答した。38 名中、既に他施設で抗がん剤調製の実習を受けた実習生は 16 名で、そのうち 6 名は飛散が確認されず、10 名は何らかの飛散が確認された。このことから、抗がん剤調製の実技指導を受けた場合においても実務指導が不十分であり、薬液を飛散させない操作技術を習得しにくい可能性が示唆された。従来の方では飛散したスプラッシュを自ら認識することは難しく、操作の正確性を確認することが困難であった。本方法により実習生自身に問題点を認識させることが容易になった。これにより原因と対策を考えながら学習していく問題解決型の実習を、実習生がより主体となって実践するうえで本実習方法は有用と思われる。